

こんにちは！ 室長の工藤です。

少し前のことですが、浦町村の歴史について原稿を書いていたところ、青森県立図書館のデジタルアーカイブから「八木橋文庫」の印が押された「里見村領持抱絵図」という藩政時代の絵図を発見しました。

里見村は、^{あわ}安房里見氏の後裔であるという窪田三郎右衛門が、宝永2年(1705)に新田開発に着手したことに始まります。この窪田家は代々三郎右衛門を名乗り、つぎの三郎右衛門が元文元年(1736)に大野村と浦町村の荒地を開発して里見村を取り立てたと由緒書にあります。また、弘前藩庁の記録によれば、宝永2年に窪田三郎右衛門は、沖館村・大野村・荒川村内で合わせて105町歩余の開発を始めたことが分かります。

その後、里見村は浦町村に併合されるといいますが、詳しいことは分かりません。地名辞典は明治9年(1876)頃とみているようです。現在、中央1丁目にある里見稻荷神社に往時の里見村を偲ぶことができます。

さて、絵図の方に目を向けることにしましょう。描かれた範囲は、東は「柳町通」、西は「浪館通」、北は現在の新町通りまでです。南ははっきりしませんが、現在の青い森鉄道の線路の辺りではないかと見立てています。この領域はほぼ当時の大野村に属し、北西側に沖館村(と思われる)の一部が描かれています。そして、この領域内の田畑が、耕作者などとともに書き込まれています。

そうした絵図の中央部、字長嶋と字片岡の間を走る「大野街道」に^{またが}跨る格好で「里見村領開発(田)」が記されています。薄い青色で着色され目立ちますが、ほかの田畑と違い耕作者等の記載は一切ありません。なお、「大野街道」は現在その一部が鉄道線路にかかっていますが、概ね復元することができます。

さらに、「里見村領開発(田)」を除く各耕作地が、長嶋・金沢・片岡のいずれの堰から取水しているかマーキングされています。これらに着目すると、絵図は「里見村」を描いたものではなく、大野村北部の田畑と水利の関係を表したもののように思えます。

ただ、肝腎な絵図の作成年代がわかりません。これを解くカギは、図の下方に描かれた2棟の「新町御蔵」にあろうと見立てています。作成年代をはじめ絵図の読み解きはまだ始めたばかりですが、藩政時代の^{大野村}の絵図はほかに目にしたことがないので、貴重な資料であることは間違いありません。

県立図書館のデジタルアーカイブには同館のHPから入ることができますので、興味のある方は訪ねてください。



里見村領持抱絵図
(青森県立図書館デジタルアーカイブ)